



大阪弁の「てんか」

その他（別言語等） のタイトル	On 'tenka' of Osaka Dialect
著者	福盛 貴弘
雑誌名	北海道言語文化研究
巻	17
ページ	189-200
発行年	2019-03-29
URL	http://hdl.handle.net/10258/00009994

大阪弁の「てんか」＊

福盛 貴弘

On ‘tenka’ of Osaka Dialect

Takahiro FUKUMORI

要旨：本稿は、田辺聖子さんが執筆した『大阪弁ちゃらんぼらん』（1978年、筑摩書房：本稿では中公文庫刊1997年改版）を読んだ私の読後感を記したエッセイである。田辺聖子さん（1928-、大阪府大阪市此花区；現在の福島区）と私（1970-、大阪府大阪市城東区）は42歳差になるが、大阪弁の世代差を感じつつ、私自身のことばや当時の風俗を書き記している。ここでは、20章めに記された「てんか」のエッセイをもとに、大阪方言の文末詞についての所感を述べ、それらを含んだ表現のアクセントを示している。

キーワード：大阪方言 文末詞 てんか

「てんか」 pp.220-231

本題に入る前の前置きの部分がなんとも微笑ましい気分になったので、まずはそこから。大阪弁話者あるいは知る者ならではの感覚である。

私は子供のころに、祝儀・不祝儀を問わず、包紙の裏に書かれる金額の「一金拾圓也」「一金五圓也」などの「也」の字を「や」とよんでいた。

漢字を崩してあるので平仮名の「や」にみえるのだ。(p.220)

ブログやエッセイでは、「～や」をたまに使うが、書類や論文では書くことはない。大阪方言である以前に口語的であるからだ。というか、書き言葉は共通語が基本なので、方言だと居心地が悪い。規範教育としては正しいんだが、その反動でこういう場ではたまに大阪弁をまじえる。

当時の昭和十年代前半の小学校では標準語が敬語になっていて、教師には「そうです」「ちがいます」などという言葉を使わなければいけない。子供たちに対して標準語教育は徹底的におこなわれていたのだ。

その結果、大阪弁は、「ハレ」と「ケ」でいえば、「ケ」中の「ケ」であり、下品な

ものと貶められていたのだ。(p.221)

80年代漫才ブーム以前は、今とは非にならないぐらい大阪弁は下品で野卑でとろく、もっちゃりした方言だというイメージが流布していた。東京で大阪弁を撒き散らすなという勢いで。今でも、大阪弁は嫌いというのは、たまに耳にする。飲み屋で仲良くなったなじみの客でも、そういうことを言われたことはある。私は別という扱いだが、生理的に嫌いなのはどうにもならない。そりゃそうやろう。逆も真なりであるから。老年層だけでなく、中年層が飯を食いながら大阪弁の悪口を言ってるのも聞いたことがある。その話を聞きながら、大阪弁で注文したら、たちまち話は止んだのだが。

さて、領収書に「10 円や」と文字で書いてあったら、私でもさすがに笑ってしまう。だからこそ、冒頭部分が微笑ましく感じたのである。それ以前に、今の時代に 10 円で領収書はもらわないから、余計に。

* * * * *

「10 円」のアクセントは、HHLL。

「10」は、LH。

「5 円」は、HLL。

「5」は「ゴー」とのぼすので、HH。

* * * * *

大阪弁にも独特の敬語はあるのだが、昭和も十年代前半にはいると、死語になっている。(p.221)

傾聴に値する。この辺りは近代上方語に詳しくないと分からないこと。生のことばは、生のことばを知っている人に耳を傾ける必要がある。研究者はそれがどの程度妥当か、どういう変化か、どういう規則かを追う。しかし、元の言葉がなければ何もできない。

「だす」「ごわんな」「ごわへん」「ござります」(p.222) は昭和の子どもは使っていないと。

旧幕のコトバとまで言われるほど古めかしいようである。

「だす」は、「わてががんのすけだんねん」と太平シローさん¹が真似していた時の印

¹ 太平シロー (1956-2012) は、太平門下でレツゴー三匹に師事する。「太平サブロー・シロー」という漫才コンビで、80年代漫才ブームの一翼を担った。漫才だけでなくモノマネも上手い芸人で、「が

象が強い。ひょうきん族が 80 年代後半。その頃の懐かしネタなんで、当然古い。

「ござります」は、花菱アチャコさん²の「めちやくちゃでござりまするがな」。エンタツアチャコをリアルタイムで知るわけもなく、誰かが真似していた記憶しかない。

「ごわんな」「ごわへん」にいたっては、理解語彙ですらない。何も思いつかないほど知らないが、おそらく基本形は「ごわす」。

ついでながら、この話が出てきたところに、子供向けの本が挙げられている。

キンダーブック、講談社の絵本、少年倶楽部、少女倶楽部、セウガク一年生 (p.222)。

もちろん、どれも知らない。人智のすすんだ昭和の子供が読むものであるらしい³。なるほど、そういう視点があったか。学界に閉じこもっていると見えなくなることがある。

* * * * *

「だす」のアクセントは、LH。

「だんねん」は、LHLL。

「わて」は、LH。「わてが」は、LLH。

「がんのすけ」は、LLLLH。

「がんのすけだんねん」は、LLLLLLHLL。

「ござります」は、HHHHH。

「めちやくちゃ」は、LLLH。「めちやくちゃで」は、LLLLH。

「ござりまする」は、HHHHHH。

「ござりまするがな」は、HHHHHHLL。

「ごわんな」「ごわへん」は、脳内にない語彙だから推測だが、仮に「ごわへん」が LHLL なら、「ごわんな」は LLLH かも。

んのすけ」は芦屋雁之助（1931-2004）である。私の世代では、『裸の大將放浪記』（1980-1997、東阪企画・関西テレビ制作）における山下清役として有名であり、シローも T シャツに半ズボンでリュックサックを背負うという山下清役の雁之助を真似されていた。

² 花菱アチャコ（1897-1974）は、横山エンタツ（1896-1971）との漫才コンビ「エンタツ・アチャコ」で、音曲ものではないしゃべくり漫才の基盤を作って、一世を風靡した。私の世代ではリアルタイムではないが、多くの芸人が当時のギャグを真似していたので、本人を見ていなくても名前とギャグは知っているという存在だった。

³ 私の世代であれば、学研の『〇年の科学』『〇年の学習』が相当する。小学館の『小学〇年生』は娯楽性が高かったもので、人智のすすんだ昭和後期の子供が読むものではなかったように感じている。両雑誌共に今は廃刊となっており、昭和ノスタルジーと化している。講談社の『たのしい〇年生』は、私が生まれる前に廃刊になっているので、リアルタイムで読んだことはない。

おそらく基本形は「ごわす」なんだが、LLHよりはHHHかも。
そう仮定すると、「ごわんな」はHHHHで、「ごわへん」はHHHLかも。

* * * * *

「そうえ」「お休みやしたらどうえ」
の大宮人風ゆかしさに対し、
「そやそや」「何や、どないしたんや」
の下賤なはしたなさ。はしたなくせに向う意気は強くない。(p.223)

ことばが汚いかどうかについては興味がない。それを汚いと思うのは、発している人の言い方が問題だからと思っている。だから、「そやそや」という上品な人もいれば、「そうえ」という下品な人もいるはず。それでも、後者が思い浮かびにくいのは、やはりステレオタイプとなっているからかもしれない。

演説中に「そうだッ」なら雰囲気盛り上がり、弁士の舌は熱を帯びるのに対し、「そやそや」だと腰挫け甚だしく、ひやかしているように(p.223)という旨が書かれている。これも掛け声を発する人次第だろう。ただし、後者の方が前者より技術が必要。どっと笑いが起こって、盛りあがるということも場合によってはありうる。丸くおさめてワンクッション入れるという効果は期待できる。勢いのまま乗せてしまい暴走させるよりは、頭を冷静にさせる効果があるといえる。

田辺さんの小説の主人公は大阪弁。読者の関西出身の女性から、主人に読ませようとしたら「男が女みtainなコトバを使って、読むに堪えない」と主人が拒否したという件がある。(p.224)

大阪弁への偏見にあふれた時代なら、そういう感覚も否めない。80年代以前の偏見は、今の比ではなかったからだ。私は小説をほとんど読まないで、最近そういう実感はないが、田辺さんによると「東京弁の小説を読んでいて、老婦人の使うコトバが、男か女か分らなくて、味気ない思いをする(p.224)」とある。これは男女差がないというわけではなく、若い男と女なら区別があるのに、中年老年夫人は「そうかい」「いやだねえ」「行くのかい」「いけないよ」などの色けのない、男っぽい語尾(p.224)なんだと。これに対し、大阪弁では「僕、知らんわ」「あいつ、こんなこと、言いよんねん」「あいつには黙って行こな」「オレ、言いたいねん」は、「僕・オレ・あいつ」で男だと分かる(pp.224-225)という。

これは完全には首肯しがたい。例えば「知らんわ」の「わ」が「わあ」となるのは、私の直感では女性の方が多い。一方で、「黙って行こな」は、長短を問わず若干女性っぽい。「あいつ」があってもそうである。これは個人差があるが、「黙って行こ」「黙って行

こうや」の方が男っぽい。ただ、性差を越えてどちらも使う表現なので、線引きは難しい。

「言いよんねん」は現代ではどの程度使用語彙なのか分からないが、私は「言うてんで」になり、「よん」が男っぽくない。ただ、確かに「ねん」には男女差がない。今となっては、古めかしさはあると思うが。語尾の性差がないという点についてはあると思うのだが、そもそも大阪弁は話し言葉において間接話法を使わず、引用は全て直接話法で成り立ってるので、話し言葉では発する時の声質の模写によって男か女か分かるという利点がある。

* * * * *

「そやそや」のアクセントは、HLHL。

「そや」は、HL。「そうや」は、HLL。「そうだ」は、HLL。

「なんや」は、LHL。

「どないしたんや」は、HHH HLLL。

「そうえ」「お休みやしたらどうえ」は内省がきかないが、勝手に思ってる京都弁風に言えば、「そうえ」は、LLH。「お休みやしたらどうえ」は、LLLLHLLL LLH。

「僕」は、LH。子どもを呼ぶ時なら、HL。

「オレ」は、LH～HH。「あいつ」は、LLH。

「僕、知らんわ」は、LH HHHL。

「あいつ、こんなこと、言いよんねん」は、LLH HHHHL HLLLLL。

「言うてんで」は、HHHHL。

「あいつには黙って行こな」は、LLLHL LHLL HHH

「黙って行こ」は、LHHL HH。「黙って行こうや」は、LHHL HHLL。

「オレ、言いたいねん」は、LH (～HH) HLLLLL。

* * * * *

尤も、下品な言葉になると、男性だけが使うものに「じゃ」とか「どォ」などという

のがあり、

「お前、何じゃ。そんなことしてええ、思とんかッ！」(p.225)

男だけかどうかは、断言できない。本文では「いかに怖い姐さんでも「じゃ」は使わない」とあるが、疑わしい。ただ、男勝りなのか男っぽくなのか、単にガラが悪いだけなのか、少数派ながらいないわけではないと思う。

「じゃ」は大阪市内より西に行けば行くほど増える。姫路あたりから「や」は「じゃ」になるので。また、摂津方言より南だと、直感なんだが女性の「じゃ」は増えるかもしれない。

他に「どォ」の例として、ケンカ出入りの際の「撲ッ倒されッどォ」(p.255)が挙げられている。これは少なくとも私は使わない。『じゃりん子チエ』より『ミナミの帝王』の大阪弁っぽい⁴。

男性専用語尾には、このほかに、「わい」がある。これは大阪の鉄火コトバ⁵で、むろん志操高雅な士君子は使わない。長屋のオバハンなんぞが、ナマケモノの亭主を早く仕事に出そうとして尻を叩く、そういうときの返事として牧村史陽氏の用例によれば、

「やかまし言はんかて、今いくわい」(「大阪方言辞典」)

などと用いる。(pp.225-226)

使わない私が志操高雅な士君子であることは言うまでもない。私の世代だと「わい」は使わないような気がする。なお、「わいな」のように「な」がつけば女も使える(p.226)とのこと。「わいな」は聞いたことがあるかもしれないが、記憶がない。少なくとも同世代のことばではない。

男「あいつ、女房（よめはん）居るねんで。知らんねんな」

女「知ってるわいな。知ってるけど、惚れたんやからしょうないやないかいな、ほっといてんか」(p.226)

大阪弁の語尾満載である。

* * * * *

⁴ 『じゃりん子チエ』(はるき悦巳、1978-1999、漫画アクション連載)におけるテツの口調よりも、『難波金融伝・ミナミの帝王』(天王寺大原作、郷力也作画、1992-連載中、週刊漫画ゴラク連載)における萬田銀次郎の口調の方が「どォ」の印象が強い。なお、ミナミの帝王に出てくる登場人物の大阪弁は、河内方言をさらに誇張した形になっており、現実にはあまり聞くことのない表現形が多い。

⁵ ここでの鉄火は鉄火打ちの略語で、博徒、ギャンブラーのことである。

「お前、何じゃ。そんなことしてええ、思とんかッ！」

「お前」のアクセントは、LLH。「何じゃ」は、LLH。

「そんなことして」は、HHHHL HL。「ええ」は、LH。「おもとんか」は、HHHLL。

「撲ッ倒されッどォ」

「はったおされる」は、HHHHHHH。

「張る」は、HH。「倒す」は、HHH。

「はったおされっどー」は、HHHHHHHLL。

「やかまし言はんかて、今いくわい」

「やかまし」は、HHHL。

「言わん」は、「HHH」。「言う」は、HH。「言わんかて」は、HHHHL。

「今」は、LH。「行く」は、HH。「行くわい」は、HHLL。

「今いくわい」は、LLHHLL。

「あいつ、女房（よめはん）居るねんで。知らんねんな」

「あいつ」は、LLH。「よめはん」は、HHHH。「おる」は、HL。

「おるねんで」は、HLLLL（文末に強調上昇調があることも）。

「知らん」は、HHH。「知る」は、HH。

「知らんねんな」は、HHHLLH。

「知ってるわいな。知ってるけど、惚れたんやからしょうないやないかいな、ほっといてんか」

「知ってる」は、LLLH。「知ってるわいな」は、LLLHLLL。「知ってるけど」は、LLLHLL。

「惚れる」は、HHH。「惚れた」は、HLL。「惚れたんやから」は、HLLLLLL。

「しょうない」は、HHLL。「しょうないやないかいな」は、HHLLL LLHLL。

「ほっとく」は、HHHH。「ほっといてんか」は、HHHHHHH。

* * * * *

先述した「あいつ、女房（よめはん）居るねんで。……」だが、この会話を共通語に訳せと言われると厄介である。「よめはん」は、大阪弁では普通の言い方。自身の息子に

嫁いだ女性の意味ではなく、自身に嫁いだ女性を指す。

「居るねんで」は「居んねんで」の方が、より自然である。「いるんだよ」が近いかな。「知らんねんな」は「知らないんですね」とでも訳しておく。この「な」は確認要求か。「知ってるわいな」の「わいな」は強調だが、訳しにくい。「当然知ってます」としておく。「しょうない」は「しょうがない」。私は「しゃあない」だが、そこは置いとく。「やない」は素直に「ではない＞じゃない」。「かいな」は難しい。「かい」は「か」なので、この文脈だと「ですか」となる。この文脈では感嘆は感じとれない。「ほっといてんか」は「放っておいてもらえ（あるいは、くれ）ませんか」。

以上をふまえた直訳は以下の通りになる。

男「彼、妻がいるんですよ。知らないんですね。」

女「当然知っています。知っているのですが、惚れたのですからしょうがないじゃないですか。放っておいてもらえませんか。」

素直な感覚として、共通語に訳すと、空々しい会話になってしまい、下衆の勘繰りという感じも薄まる。そして、ほんまに放っというやるほうがええかしらんと思ってしまう。

* * * * *

今回は共通語に訳した文の大阪弁アクセントを。

「彼」のアクセントは、HL。

「妻」は、HL。「妻が」は、HLL。

「いる」は、HH。「いるんです」は、HHLLL。「いるんですよ」は、HHLLLL。（文末に強調型上昇調がかかることも）

「知る」は、HH。「知らない」は、HHLL。「知らないんですね」は、HHLLLLLL。（文末に強調型上昇調がかかることも）

「当然」は、HHHH。

「知っています」は、LLLHHH。

「知っている」は、LLLHH。

「知っているのですが」は、LLLHHHLLH。（文末に強調型上昇調がかかることも）

「惚れたのですから」は、HLLLLLLL。

「しょうがない」は、HHHHLH。「しょうがないじゃ」は、HHHHLLL。

「ないですか」は、LHLLL。

「放る」は、HHH。「放って」は、HHHH。「放っておいて」は、HHHHHLL。
「もらえませんか」は、HHHHHH。「もらえませんか」は、HHHHHHH。
「放っておいてもらえませんか」は、HHHHHHHHHHHHHHHHHHHH。(文末に強調型上昇調がかかることも)

* * * * *

「小春ウ。死んだらあかんでェ」(p.226)

「でえ」は古くさいようで古くさくない。使っていないようで、使ってる。聞くと古いなあと思うのだが、知らぬ間に使っている文末詞の1つ。いわゆる強調なんだが、「ぞ」は書き言葉的で、「ぜ」はキザすぎる。私はボギーではないから、キザでいられたらとは思わない。「〇〇だぜ」というのは、大阪弁でないという以上に、いまだに気持ち悪さを感じる。「いきり」ではないが、「かっこつけ」という感じ。もちろん、もともと方言形として使う人を非難しているわけではない。嫌なものは嫌。ピーマンやニンジンと同じような感じ。私はどっちも好きだが。

牧村史陽説では「ぞえ>で」(p.226)と記されている。藤田まさとさん⁶が作詞した『旅笠道中』における「情けないぞえ、道中しぐれ」から田辺さんも同調している。「でえ」はいかにも大阪弁で感じだが、「て」は共通語にも広がっている。ただ、共通語では「って」であって、「て」ではない。いわゆる引用の「と」に近いが、近畿方言圏以外は促音が入るのが普通である。だから、大阪弁のつもりで話しても、促音なしでは言えない人が多い。そこに大きな違いがある。

「分かってるでえ」だと、みなまで言うな、私はあんたの言うてることよう分かてるぞという感じ。「分かってるて」だと、それぐらい理解してるから大丈夫という感じ。確認度合いの軽重の違いか。「て」だと、押しつけがましきはない。示威や恫喝(p.227)のニュアンスも全くなくなる。

大阪弁で「って」を言わないわけではない。ただ、「って」の方が「て」より強調感ややある。あるいは共通語の逆輸入か。私は両方使うのだが、違いを上手く内省できない。

共通語の「ぞ」は大阪弁では「で」、「よ」は「わ」、「ね」は「な」なんで、「さ」が「て」になるのか。「さ」は「ぜ」よりかっこつけなので、どうも受け付けられない。

* * * * *

⁶ 藤田まさと(1908-1982)は、静岡県出身の作詞家である。「ぞえ」の語形が当時の大阪弁にはなかったから、田辺聖子さんが知っている歌詞から推測したのであろう。

「小春ウ」のアクセントは、HHHH。

「死んだら」は、HLLL。「死ぬ」は、HH。

「あかんでエ」は、HHHHH。「あかん」は、HHH。

「情けない」は、HHHLL。

「情けないぞえ」は、HHHLLLL。

「情けないでエ」は、HHHLLLL。強調形なら、HHHLLHH。「情けないで」は、HHHLLL。

「情けないぜ」は、HHHLLL。

「分かってる」は、HHHHH。

「分かってるでエ」は、HHHHHHH。「分かってるで」は、HHHHHL。

「分かってるって」は、HHHHHHL。「分かってるってー」は、HHHHHHLL。

「分かってるて」は、HHHHHL。「分かってるてー」は、HHHHHLL。

「分かってるぞ」は、HHHHHL。「分かってるぞー」は、HHHHHLL。

「分かってるよ」は、HHHHHL。「分かってるよー」は、HHHHHLL。

「分かってるわ」は、HHHHHL。「分かってるわー」は、HHHHHHL。

「分かってるね」は、HHHHHH。「分かってるねー」は、HHHHHHL。

「分かってるな」は、HHHHHH。「分かってるなあ」は、HHHHHHL。

「分かってるさ」は、HHHHHL。

ついでに、「食べてる」は、LLLH。「食べとる」は、LLHL。

「食べれるぞ」は、LLLHL。「食べとるぞ」は、LLHLL。「食べてるぞー」は、LLLHLL。

「食べとるぞ」は、LLHLLL。

「食べてるでエ」は、LLLHLL。「食べとるでエ」は、LLHLLL。「食べてるで」は、LLLHL。

「食べとるで」は、LLHLL。

「食べてるって」は、LLLHLL。「食べとるって」は、LLHLLL。「食べてるってー」は、LLLHLLL。「食べとるってー」は、LLHLLLL。

「食べてるて」は、LLLHL。「食べとるて」は、LLHLL。「食べてるてー」は、LLLHLL。

「食べとるて」は、LLHLLL。

「食べてるぞ」は、LLLHL。「食べとるぞ」は、LLHLL。「食べてるぞー」は、LLLHLL。

「食べとるぞー」は、LLHLLL。

「食べてるよ」は、LLLHL。「食べとるよ」は、LLHLL。「食べてるよー」は、LLLHLL。

「食べとるよー」は、LLHLLL。

「食べてるわ」は、LLLHL。「食べとるわ」は、LLHLL。「食べてるわー」は、LLLHLL。

「食べとるわ」は、LLHLLL。

「食べてるね」は、LLLLH。「食べとるね」は、LLHLL。「食べてるねー」は、LLLLHL。

「食べとるね」は、LLHLL.L。

「食べてるな」は、LLLLH。「食べとるな」は、LLHLL。「食べてるなあ」は、LLLLHL。

「食べとるな」は、LLHLLL。

「食べてるさ」は、LLLHL。「食べとるさ」は、LLHLL。

* * * * *

「命まで賭けた女がこれかいな」の「かいな」は感嘆、「ほんまかいな」の「かいな」は疑問 (p.228) と書かれている。文末詞の機能というのは、無限に広がるわけではないが多種多様である。

「かいな」は私も使うが、「わいな」は使わない。「知っとるわい」の「わい」というのもほとんど使わない。

「てんか」は使わなくはないが、私の中での頻度は減ったように感じる。「黙っててんか」という相手が周りにいないからかもしれない。命令というより依頼なんだが、ぞんざいでも「黙っとけ>黙っといて」ですませる。もっと柔らかくなら、「黙ってくれへんか」。「てんか」はやや強めの命令、かつベタな大阪弁なので、よそいきの大阪弁としては使いにくい。

この最終章では、「てんか」を大阪弁の代表にしてんかとしめているが、それについては異存はない。ただ、2017 年度下半期の NHK 連続テレビ小説のタイトルとなった「わろてんか」は、私にとっては理解表現であるが、使用表現ではない。使用している世代をふまえると、「てんか」は 21 世紀では代表の座を追われた表現である。

* * * * *

「命」のアクセントは、HLL。「命まで」は、HLLLL。

「賭けた」は、LHL。

「女」は、HLL。「女が」は、HLLL

「これ」は、HH。「これかいな」は、HHHLL。

「ほんま」は、LLH。「ほんまかいな」は LLLHLL。

「知っとる」は、LLHL。「知っとるわい」は、LLHLLL。

「黙る」は、LLH。「黙って (命令)」は、LLLH。「黙って (連用中止)」は、LHLL。

「黙っててんか」は、LLLLHHH。

「黙っとけ」は、LLLHL。「黙っといて」は、LLLHHH。

「黙っててくれへんか」は、LLLLL HLLLL。

「してんか」は、HHHH。

* * * * *

この章終わり。

謝辞

* 本稿は、ココログ「福盛です。」(<http://fukumori-desu.cocolog-nifty.com/blog/>)に掲載された『大阪弁ちやらんぼらん』「てんか」を読んで」その1(2018年3月1日)、その2(3月7日)、その3(3月29日)、その4(4月2日)その5(5月4日)、その6(6月19日)、その7(7月8日)の加筆改訂版である。(インデックスは <https://fukumori-takahiro.amebaownd.com/posts/page/1>) 自身の母方言に対していろいろ思い出しつつ、素朴な基礎資料として記しておこうというリハビリを兼ねたエッセイである。そのため、文中に出てくる大阪弁に関する言い回しをそのままにしてあることについては、本稿の性質上ご了承ください。また、引用に関しても表現の変更は行なっていない。なお、田辺聖子さんと面識はない。

こういった性質のものでも掲載を許可していただいた編集委員諸氏ならびに査読者に感謝の意を申し上げる。

参考文献

田辺聖子(1978)『大阪弁ちやらんぼらん』筑摩書房(本稿では中公文庫刊1997年改版)

執筆者紹介

氏名：福盛 貴弘

所属：大東文化大学外国語学部

Email：ICG01649@nifty.com